

県史談会 令和 3 年 9 月 12 日(日) 史跡めぐり

〈愛川町三増・角田・海底地区〉

※参考資料の出典は《 》内に記しました。いろいろなものを使っていますので、文体は不統一です。また、誤字脱字はご容赦ください。

～歩き出す前に～

その1 三増の地名

- A 志田峠、中峠、三増峠があり、この3峠の三馬背(みませ)
- B 志田沢・深堀沢・栗沢の3沢の三間瀬(みませ)
- C 奈良朝のころ、北相一帯が官牧地となり、献馬を寄せ集めた所がこの地にあったので「御馬寄せ」とと称した。この「ミウマヨセ」が、のち「ミマヨセ」となり「ミマセ」となった
ほかにもいくつかある

《『愛川町郷土誌』》

その2 明治7年の三増の戸数と人口

明治7年11月現在愛川地域は、足柄県第3大区第4小区に属し、愛川地域の戸数人口が次の様に数えられている。(『愛甲郡制誌』)

八菅村	102戸	498人	半縄村	169戸	777人
八菅山村	32戸	152人	熊坂村	132戸	626人
三増村	275戸	1,235人	角田村	179戸	809人
田代村	139戸	644人	半原村	385戸	1,649人

《『愛川町郷土誌』》

その3 上三増 京の都にさも似たり どこを向いても 山と大坂

上三増にはこんな歌が伝承されている。上三増は三増峠下の山間の宿(しゅく)で、たしかに何処を向いても山と(大和)大きな坂(大阪)である。

《『黄色いチラシ』平成9年12月号 大塚博夫「名〈迷〉言・名〈迷〉句

【見学箇所と参考資料など】

1. 清徳寺（三増大久保1730）

宗派：真言宗（大師派） 『風土記稿』には古義真言宗とある

山号：甘露山 院号：宝積院

本尊：大日如来 寺格：別格本山

本寺：高野山金剛寺 『風土記稿』には葉山島の東林寺とある

開山：真海(寛治3年〈1089〉卒) 『風土記稿』には珍算(文亀2年〈1502〉卒)とある

縁起：寺伝の文書なし

《『愛川町の寺院 三増地区』》

草創以来、再三にわたり無住のときがあつて、多くの仏像・什物などが散逸し、現在は寺歴を知る遺物も少ない。かつては三増村の氏神・諏訪神社の別当寺でもあった。

境内にある鎌獅子宮については、『愛甲郡制誌』に「境内の獅子堂は本尊の薬師如来を祀ったもので、至徳元甲子年(1384)僧真海の開基創立したものだ」との記事がある。現在この獅子堂には顎の無い行道獅子の頭(町指定有形文化財)が奉祀されている。

《『愛川町郷土誌』》

清徳寺の鎌獅子（町指定有形民族文化財）

中世の製作といわれる木造彩色の獅子頭です。長さ43cm、幅47cmで、下顎を欠いていることから鎌獅子の名があります。行道獅子の頭で、甘露山清徳寺の獅子宮に厄除けの御神体として祀られています。

この獅子を舞わすと大量の水を飲み干すので、下顎をはずして干ばつのおこらぬようにし、雨乞いの呪具として用いられていたと伝わっています。

《『愛川町の文化財』》

2. 棟岩院（三増上馬込476）

宗派：曹洞宗 山号：大恵山 本尊：釈迦如来

本寺：満珠山勝樂寺（田代平山）

開山：棟岩宗梁大和尚（勝樂寺4世）

縁起：寺伝の文書なし

《『愛川町の寺院 三増地区』》

明治5年の学制発令のとき、翌6年より棟岩院は三増学校（養成館第二支校）の仮校舎であった。

《『愛川町郷土誌』》

ちなみに、現在高峰小学校に高橋泥舟筆の木板横額「三増学校」がある。
別添『黄色いチラシ』平成11年5月号表面参照

旧鐘楼門は富くじで建立

別添『黄色いチラシ』平成2年12月号参照

菅沼米海の句碑（石段を登りつめた左側）

台石もなく自然石の小さな句碑がある。高さ88cm、厚さ18cm、根巾58cmの石に

川霧の雲に明けゆく冬至哉 米海居書

と3行に分けて刻まれている、碑陰に

米海者伊予国住人姓菅沼少好俳諧以諷月為生涯挽遊東地止相州有年到処俳諧從慶応三丁卯歳十月廿日会病寂本村佐藤氏之於青居八十有一小字称八郎号自在堂

以静男鶴巢永存書

とあって生国俳遍歴没年等を知るよすがとしているが、惜しくも建立年月日が刻んでいない。

佐藤^{りょうそう}鶴巢の句碑（境内北方）

佐藤以静の長男であることは、米海の碑文や当碑陰によっても明らかである。

乾鮭の春来るそりをうちにけり 鶴巢

の句が三行に刻まれている。碑の高さ1.08m、巾53cm、厚さ11cm、花崗岩の高さ35cmの台石に据えてある。台石には看青社の文字が見える。碑陰に次のように記されている。

君者佐藤姓以静翁長男也号松露軒
昭和二年三月二十三日没焉行年七十
昭和四年四月小練忌建立

《句碑どちらも『愛川町古今俳句集成』》

3. 小野澤龍吉 生家（三増上馬込466）

小野澤龍吉は慶応元年(1865)4月11日生まれ、昭和12年6月12日没。
明治21年創立当初の荻野学校教師、明治24年7月に判検事登用第1回試験に及第、水戸区裁判所詰となり、以後浦和、新潟、東京、千葉、根室、盛岡、宮城、山形、旭川など転勤。その後弁護士となる。

別添『黄色いチラシ』平成15年3月号両面参照
会誌『県央史談』第57号に拙稿が載っています

4. 三増 諏訪神社（三増後ヶ谷587）

『新編相模国風土記稿』に「村ノ鎮守ナリ 神体円石一顆ヲ置 本地
仏薬師ヲ安ス 例祭七月十七日 清徳寺」とある。

境内社として日枝社〔石造〕と八坂社〔木造〕がある。八坂社（天王社）
はむかしは別に社屋があつたが今はなく、神輿だけ安置されている。清
徳寺裏の山を天王山といい、山頂にある石祠が本宮である。

現在は県無形民族文化財指定の獅子舞が7月21日境内を中心に舞われ
る。

《『愛川町郷土誌』》

神奈川県指定無形民族文化財 三増の獅子舞

三増は甲州街道の宿場として中世から知られているところで、伝統の
獅子舞はこの宿場の諏訪神社（伝1235年創建）の摂社である八坂神社お
祭りに行われます。

これは一人立ち三頭獅子舞で、関東一円に分布するものと同じ系統に
属し、約300年の星霜を舞い継いできています。また、この獅子舞は、
古くから諏訪神社を中心に1町(約110m)以外の土地に踏み出さない掟
がありました。

獅子がしらは父・母・子の3頭で、父を巻獅子、母を玉獅子、子を剣獅子といい、祭り当番の家から「道行きの渡り拍子」で神社まで行進し、忌竹をめぐらせた舞場の中で舞います。この他、天狗、教導役としてバンバ、ささら摺り役などがつき、その舞いぶりは大きく優雅で他に類のないものといわれています。

《昭和48年10月 愛川町教育委員会設置案内版》

小野月川の句碑（鳥居左側）

碑面につぎのような句と碑文が刻まれている。

ばらばらと雨のころがるはせをかな 金波堂 月川

永祿の昔甲相のますら武夫が血戦の地として聞えたる三増の里に小野利一てふ建気なる壮年あり、性忠孝篤実にして家業に励みその晦雅の道に心をよせ号を月川と呼び吟詠いと優れたりき 然るに日露の戦起るに及び召されて歩兵と為り出征軍に従ひ毎戦壮烈なる動作を為し常に隊中の模範なりしと聞きつるにあわれ明治三十八の年三月十日三台子附近の激戦に於て名誉の戦死を遂げたりける。茲爾同好の郷人相謀りその遺吟を石に彫り村社のほとりに建て此の古戦場にこのをの子ありてふことの記念となさまほしくほりするに随喜の餘りかく蛇足を添え侍りぬるものは湘南の不染野衲な隣

明治三十九年 五月 釈勿用応需書

碑陰に明治三十九年九月建之小野平七と彫ってある。

高さ1.4m、巾52cm、厚さ11cm、台石に看青社としてあるので、^{*}以静を中心とした連中が大いに協力したものであろう。

《『愛川町古今俳句集成』》

神奈川県下芭蕉句碑中最大 大山石尊神社不動堂石段右側

※印の以静は、三増の人で本名は佐藤才一郎、看青居以静と号す。

長男の今助は看青居鶴巢と称し、親子2代に亘って俳句の宗師。父以静の遺命によるか、松尾芭蕉没後200年忌追善と亡父の10年追善を含めて大山石尊神社不動堂石段右側に〈雲折々人を休る月見哉〉の神奈川県下芭蕉句碑中最大の碑を建立した。揮毫は高橋泥舟による。

別添『黄色いチラシ』平成11年5月号両面参照

5. 卵菓屋・中央養鶏（三増1000）

新鮮タマゴの直売店で休憩します。ロールケーキやプリンなども人気です。

6. 子の神

この「子の神」は、古くより蚕かいこの神として信仰されている。かつては、養蚕ようさんの始まる前の子ねの日にここへ参り、養蚕がうまくいくよう祈願するのが習わしであった。

子の神は『子の権現』の信仰からでたといわれ、一般では農作神とかきのえね甲子さま（大黒）として、五穀豊作・招福・養蚕の神とされるとともに、北の方角（子の方）をつかさどる神でもあった。

そのようなことから十二支の子や大黒さまのお使いなどに関連して、子はねずみであると解釈されてきた。

この子の神が陽石であるのは、農作神として種の豊穰の象徴のほか、子ねが根ねであり、子こや蚕（オコサマ）にも通じるからであろう。

《昭和59年2月 愛川町教育委員会設置案内版》

隣地の峰公民館前庭には河野謙三書の「角田峯の原土地改良完成記念」の大きな石碑がある。

7. 福泉寺（宮ノ下2489）

宗派：曹洞宗 山号：竜角山 本尊：如意輪観音

本寺：珠山勝楽寺 開山：嶺岩宗雲（勝楽寺六世）

寺の開創年は、『皇国地誌残稿』に寛永14年(1637)とあり、『愛甲郡制誌』には文禄2年(1593)と記載されている。ちなみに、『愛川町の寺院 田代地区』に嶺岩宗雲の卒年は寛永7年(1630)4月18日とあるから、どちらも該当しない。

角田学校（養成館第一支校）の仮校舎

8. 角田 八幡社（角田宮の上2371）

『新編相模国風土記稿』によると「角田村の鎮守で、神体は銅像及円

石で、天正19年(1591)に社領2石の御朱印を賜わり、内6斗6升6合6勺を田代村八幡社へ分配するを例としている。また永正15年(1518)の棟札には、奉勸請八幡宮一字永正十五年七月十五日、法主八菅山□□坊願主和田但馬□□とある」と八幡社を説明している。末社に稲荷、第六天、辨天が記され鐘楼には元文3年(1738)の鐘を掛くとある。

《『愛川町郷土誌』》

9. 戸倉 弁財天 (大字角田 字下戸倉2298)

中津溪谷の美を作ってきた川が、田代、戸倉に出ると急に山間が開けてくる。角田に入るところでヒョウタン形にくびれている。その左岸の岩山に祀られているのが、戸倉弁天であるから、如何にも弁財天に相応しい祭場である。社殿が荒廃したので昭和46年4月1日堂宇竣工。

《『愛川町の小祠・小堂 高峰地区』》

伝説 弁天社と弁天淵

ここの裏手中津川の淵底は、江の島の弁天さまの岩屋まで穴で通じているうえ、なお、その穴は西にのび、半原、塩川滝上の江の島淵の底にまで至っているという。

むかし、江の島の弁天さまが、岩屋から穴伝いに江の島淵に向われたとき、あまりにも疲れたので、ひとまずこの淵に浮かびあがりからだを休めた。そのおり、弁天さまのお姿を見つけた村人たちは「もったいないことだ」と伏し拝み、淵の上の森に社をたててお祀りしたという。これが、今の弁天社で、裏手の淵を弁天淵と呼ぶようになった。

また、淵が江の島に通じていることから、満潮のときには海の潮がここまでさしてくるといわれている。

《昭和59年2月 愛川町教育委員会設置案内版》

10. 海底 日月社 (大字角田 字海底4222)

『皇国地誌残稿』に、祭神 大日●尊(おおひるめのみこと) 月読尊(つきよみのみこと)と記されている。

『新編相模国風土記稿』に「小名海底の鎮守なり石二顆を神体とす、永禄2年(1559)の棟札あり」や「相州上毛利庄海尻村之施主之番匠衆」な

どの記載がある。

《『愛川町の小祠・小堂 高峰地区』》

海底紙（おぞこうがみ）

楮を原料として海底地区で生産されていた伝統の手漉き和紙で、かつては販路も広く、丈夫な和紙として名が高く、障子紙、傘や凧の紙などに使われていた。

伝承によると、成井文左衛門が寛政年間(1789～1801)に信濃国で製紙法を習得して始めたものだという。また、天保9年(1838)の文左衛門の子の成井文七が下野国烏山より紙漉き職人を招き、業を起したのが基だという説もある。のち、京都の嵯峨御所御用の紙を漉くまでに発展した。

大正6年(1927)埼玉県比企郡小川町の製紙技術を導入し、質と業態の改善をはかった。この前後が最盛期で、主たる製品は障子紙であり、業者は10余軒に及んだ。だが、現在は生産していない。

《『愛川町郷土誌』》

11. 平山 琴平神社（大字田代 館山1829）

もとは、現社地の前にそびえる館山（海拔247.5m 現在は山砂利採取のため山容はない）の中腹にあって勝楽寺で奉祀したものと伝えられている。『新編相模国風土記稿』に「金毘羅社 勝楽寺持」とあるがこの社であろう。通称こんぴら峰と呼ばれていた館山の旧社地は、かなりの広さの境内をもっていて例祭にはそこでお神楽をした。

現地に遷座したのは何時頃か詳らかではないが、祠内の神札に奉遷座 壱棟竣工、明治33年とあるのでこの年が遷座の年であろう。

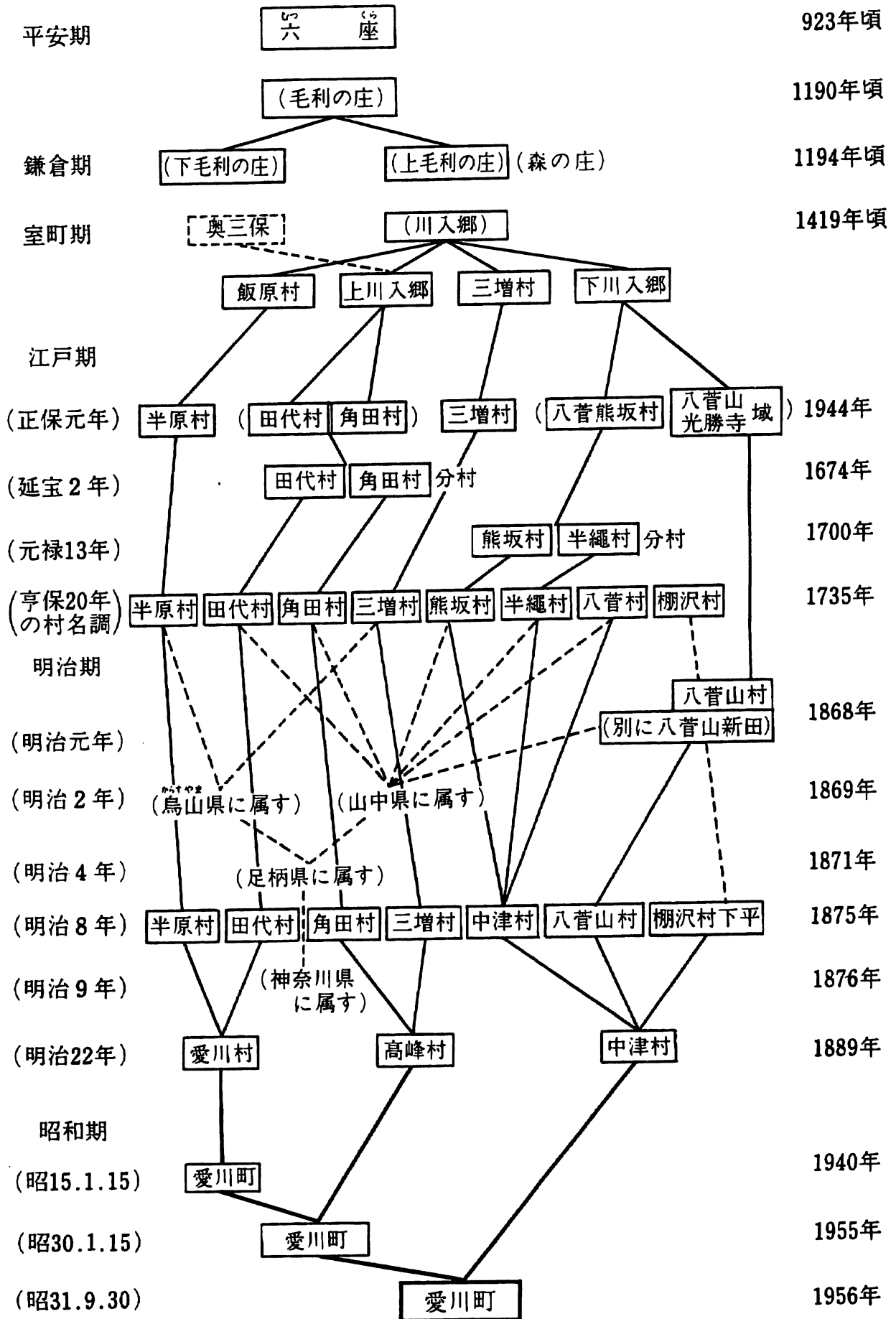
中宮の内に納められている弘化年代(1844～48)の神札に覚眼院の名があるが、これは八菅山権現の別当光勝寺の本坊24院の内の一院である。

例祭のときに前庭にある通称「さんのういし」とよばれる神石に注連縄をはる。この石は、琴平社遷座以前からあったと推測され、山王には社地がなく、岩石のみを崇敬しており、琴平社の例祭に注連縄をまくのは、その祭祀慣習を踏襲しているからであろう。

《『愛川町の小祠・小堂 田代・細野地区』》

愛川町域変遷模式図

[昭56.4.16 81.愛川町勢要覧用として考案作成(中村)]

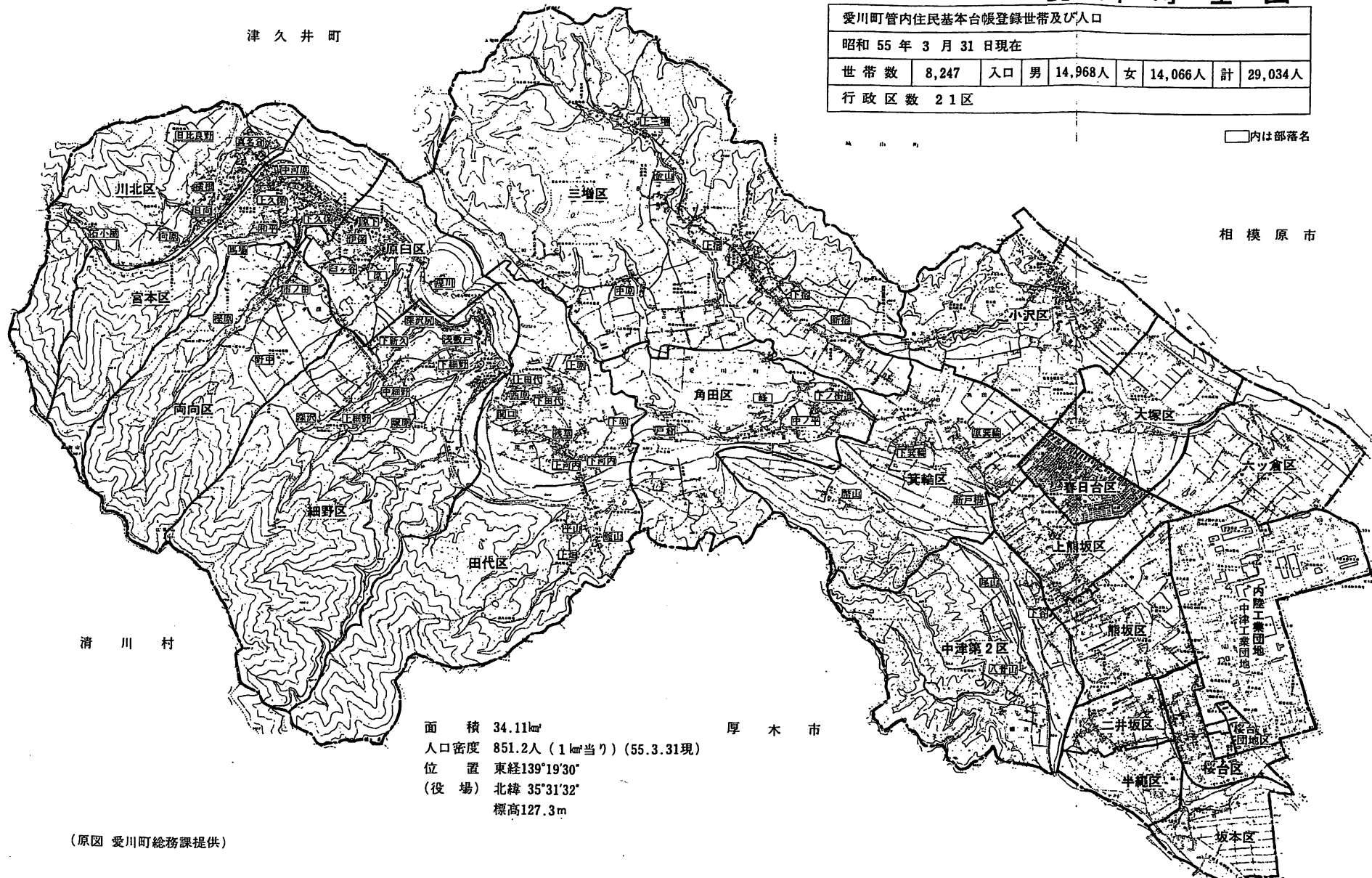


愛 川 町 各 区 總 図

愛 川 町 全 図

愛川町管内住民基本台帳登録世帯及び人口									
昭和 55 年 3 月 31 日現在									
世 帯 数	8,247	入 口	男	14,968人	女	14,066人	計	29,034人	
行政 区 数 21区									

□内は部落名



面 積 34.11km²
 人口密度 851.2人 (1km²当り) (55.3.31現)
 位 置 東経139°19'30"
 (役 場) 北緯 35°31'32"
 標高127.3m